

《入選》

差別の意識

稲枝中学校 1年

藤野 友希 さん

私は「ちがいのちがい」や人権のことを学んだ中で、感じたことが二つあります。

一つ目は、世界人権宣言の学習をした時に三分の一ぐらいの項目が当たり前だと感じたことです。日本では、人を物のように売り買いうることも、決められた宗教を信仰しないといけないことありません。そんな平和で自由な国に生まれたため、世界人権宣言の学習をした時も、正直に言うともあまり実感できませんでした。しかし、このように三十条も定められているということは、過去には世界人権宣言の中に入れるきっかけとなったこと

があるからだと言われ、そこで初めて、この宣言の重要さを実感することができました。

二つ目は「ちがいのちがい」の学習で、男女差別についての考えたことです。男女差別は、どこまでが差別で、どこからが差別ではないのかの線引きがとても難しかったです。例えば、兄弟の中で、姉や妹など、女性だけに家事を言いつけ、兄や弟など、男性には何も言わない場面。私は、この場面は、日本の「女は家で家事をするべき」という古い考え方が表れており、男女差別にもなるため、あまり良いものではないと思います。どうして私がこんなにも日本の古い考えを否定するのかわかると、私にも例で挙げたような体験があるからです。それは、毎年の元旦のことで、毎年、新年には、祖父の家で親戚一同が集まり、食事

をしています。お年玉ももらえるし、たまにしか会えない親戚とも会えるので楽しいのですが、どうしても納得できないことがあります。それは、後片付けです。兄弟やいとこの中で女は私しかいません。なので、食事を終え、テレビを観たり、話したりしている時も、片付けで真っ先に呼ばれるのは私だけなのです。それ以外の兄弟やいとこは、こたつに入ってまったり過ごしています。それを見ながら片付けをしていると、どうして女ばかり…という疑問が浮かび、しばらく消えることはありません。きつと、私と同じような体験をして、嫌な思いをした女性も少なくはないでしょう。そのため日本に古くからある、男尊女卑的な考え方が、人々の意識の中から無くなる日が早く来てほしいです。

私は、人権学習を通して、あってもよい違いと、あってはならない違いの区切りは、人によって全く異なると分かりました。その感覚の違いが、思わぬすれ違いを生み、その結果、嫌な気持ちになる人がいると分かりました。みんなの意識や感覚を統一することは難しいですが、それぞれが相手のことを気づかうことで、少しでも嫌な気持ちになる瞬間が減ると思います。なので私は、常に相手の気持ちを考えて発言し、どんな「ちがい」も受け入れられる人になりたいです。